
いのちよりも、こいがおもいなんて。

鈴懸みどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いのちよりも、こいがおもいなんて。

【Nコード】

N82450

【作者名】

鈴懸みどり

【あらすじ】

命よりも、恋が大切？

命よりも、恋が必要？

命よりも あなたよりも、恋は？

いつといつのち。(前書き)

たぶん、恋のはなし。

いつといのち。

有名な恋の『はなし』は、
だいたい信じられないエネルギーで、信じられない出来事を起
す。

その結末の中には、相手か主人公のどちらか、もしくはどちらもが
命をおとす場合もある。

事實は芝居や小説にされ、悲しみとともにわたしたちに感動をもた
らす。

芝居や小説から生み出されたものであったとしても、受け入れられ、
ベストセラーになることもある。

現代では、映画やドラマの原作になるものもでてきた。

だが恋のはなしには、恋そのものを指す言葉では共通点はあるが、
ほとんど統一性はない。

特にキャラクターでの偏りは、ほとんど無いに等しい。

それほど永くはない人類の歴史で生まれてきた、恋のはなし。

その中には様々なキャラクターが現れる。とくに女性陣の個性的な
こと。

男を誘惑する女

病弱な箱入り娘

大富豪の娘

おてんば

いじめられっ子

いじめっ子

孤児

美女

醜い者
甘ちゃん
ツンデレ

：

その数は、人々が新しい言葉を生むに従って、多様な広がりを見せている。

いや、言葉が女性の多様さに追いついてきたというべきであろうか。その多様さは、地球上の草花を一つの個性にあてたとしても、足りないくらいではないだろうか。

しかし、それほどの違いのある彼女たちも、皆一様に恋をする。

大体がその恋に必死で、たまにその代償で自分の命を失ったとしても、後悔はしていない。

あくまではなしの中で、という前提がつくが。

話は変わるが。

ここに、命よりも恋を選んだはなしを唾^{わら}う女がいる。

彼女は、

命を落とした女は、本当はしぶとく生きていたりするのではないだろうか。

なんて考えて、そのつながりで落語のはなしを思い出し、悲劇を聞きながら愉しそくに唾^{わら}う。

また、他の時は、

はなしの主人公は、実はあの世で後悔していたりしないだろうか。もしかしたら、あの世で

「あんなボンボンと駆け落ちするんじゃないわ！」

なんて叫んでいるかも　と、隣が涙を流して居るのにも気にせず、主人公の愚かさを嗤う。

その非情さから、彼女は周りに何度か見放されかけたことがある。嗤い方とタイミングが、彼女を異常なものに見せてしまうので、仕方ないことではある。

が、他は周りの血の通った人間と同じであるため、完全に見放されるに至っていない。

同じどころか、友人・親のために奔走するのはあたりまえ、近所のお年寄りの相談相手まで買って出て、

日頃のあいさつの爽やかなこと。あの嗤いがなければ、かなりの人格者であるのに。

彼女と接する人々は、この一点についてはこう考えている。

「ひとは完全な生き物ではない。あの子の不完全が、嗤うことなのだ。」

「たった一点の染みくれえ、あつたほうがかわいらしいじゃあねえか。」

「変な男に引つかからなくていいんじゃない？」

こうして、今まで彼女は周囲の理解（と諦め）により、20数年という今までの人生を

疎外感をあまり感じずに、自分なりに歩んできたのである。

彼女は、悲劇を耳にするたび、嗤いながらこう言う。

「命と恋、どちらが重いか？命に決まっているじゃないか。

恋を失っても、記憶があつて、次がある。ただ命を失ったら、他の記憶もなくなり、次があるとは言えないだろう。」

そんな彼女が、命よりも恋を　選ぶ話ではない。

そんなことをしようものなら、作者の夢枕に立ち、ここ数日続く不

眠を悪化させるだろうし、
作中でも他の登場人物や舞台を再起不能にするくらい、大暴れするに違いない。

彼女の話は、おそらく。

命より恋を選ぼうとする古今東西の人間を、自分勝手に嗤い、蹴飛ばす話である。

ああ、だが一応、いまから注意しておく。

これからのなしは自己中心的彼女の視点によって構成されるので、本気にしない方がよい。

彼女はどこまでも本気だろう。そして

「命よりも恋を選ぶなど、馬鹿げている。」
と嗤ったために、救われた者もいる。

けれど恋が命よりも大事な人々が、嘘の心であったということとは断言できないし、

その人たちのなしを聞いて、救われる者もいる。

これは、後ほど記さなくてはならないだろうが、

しばらくは彼女が嗤い、蹴飛ばしたはなしでも聞いていただくか。

リジュアのち。 (後書わ)

リジュア、ちまはつりこもあ。

しゅじんじつと、あるえいのはなし。(前書き)

シリーズ短編になる…予定。

とりあえず、この話は一話完結です。

しゅじんごうと、あるえいがのはなし。

エンドロールが流れ始めても、すすり泣く音は止まず。

テーマ曲の身を切るような女性の叫びにも似た歌を聴くと更に悪化、号泣してしまっている。

やばいなあ。早く止めてくれないかな。もう限界なんですけど。もう終わったでしょう、

「止めていいよね？」

まだ震えている体に言いながら、リモコンに手を伸ばす。と、

「だめ。今いいところ。」

垂れてきた鼻水を拭おうと、ティッシュに伸びていた手で、すばやくリモコンを遠ざけられた。

エンドロールって、会社や人の名前が流れるだけだと思っのですが。どこらへんが、いいところなのでしょうか。てか、そろそろやば。仕方ない、

「…トイレ借りるね。」

立ちあがろうとすると、湿った手で腕を掴まれた。鼻水のせいでもあろう水気に嫌悪し、抵抗すると

「今いいところ！」

同じ言葉を浴びせられ。つまり、立ちあがるなどということですか。もう我慢の限界なんですけど。

体の震え、感づかれてないよね？

ええと、こういう時の対処法は、他のこと考える、でしたよね。友の変顔を思い出しながら、腰を下ろした瞬間、それは起こった。

唐突に現れた映像に、先ほどの号泣は、更にひどくなった。そして私は

我慢できなかった。

「で？止まったのは何分後？」

彼女の友（以下、友）の細目が更に細目になったところを10秒ほど観察した後、キンキンに冷えたコーヒーにミルクを入れ、かき混ぜつつ彼女は答えた。

「67分後。」

一時間くらい、と説明すればいいところを彼女は律義に、分単位で説明する。

すると、向かいに座った友は一瞬、あたたかい紅茶を口に含めるのを止めて、ため息をついた。

言っておくが、友のこのため息は良くない方に新記録を打ち立ててしまった、

正面に座している彼女に向けて出されたものだ。

わずかな罪悪感を、コーヒーとともにずずうくとすすった彼女に、友は再びその紅い唇を開いた。

「…それほど、おもしろかったのね。理由は？」

「ばかだな、と。他に助かる道はあったはずなのに、あえて氷の海へ飛び込むんだものなあ。」

彼女は思い出し、うすく色のついた目元に、笑みの皺が刻まれる。

友は、さらに細目 というか釣り目にした。

「で、爆笑してしまったと。」

低めの声に変わり始めた友に、彼女は口元を歪めながら、首を振る。「最後のセリフが、不意打ちで。エンドロールの後で

ぶふうつつくくくつ。」

抑えきれずに、口にわずかに残ったコーヒーとともに、盛大に嘖き

出す。その笑い方はまさに。
般若。

初めてこの顔を見る人は、かなりクるらしい。負の意味で。

「終わりなのに終わりじゃないって、反則じゃないか？しかも、
海に沈んだ、愛する者へ」？

ぶくく。そんなこと言うなら、もう一度、二人で助かる方法を
考えてみればよかったのに。くく。」

「加奈子^{かなこ}：とりあえず。エンドロールの後のセリフは、普通よ。多
くはないけど。」

冷たい声に加えて、やめてよ、汚いじゃない。という視線を向けら
れていることに気づき、なんとか笑いをおさめた。

コーヒートの飛沫は、なんとか、テーブルクロス内に全て落とされた
ようだ。

ウェイターさんには申し訳ないが、友の服にかからなくて良かった。
友が鬼様になるところは見たくない。

心の中で安堵の息をもらしつつ、加奈子と呼ばれた彼女は、まだ体
が震えていた。

笑いがどうしてもおさまらないらしい。

「くく。それは気をつけなくてはならないね、気を抜いた時のあれ
は一番厄介だし。」

「まったくよ。」
間髪いれないツツコミありがとう。

「…で？」と、友は分かりにくい質問をする。
しかし、同じことを何度も繰り返している身、内容は聞き返す必要
はない。すぐに答える気はないが。

「ここまでわかつているのに、なんで聞くの。想像できるでしょ、
有香^{ゆいか}ちゃん？」

「たとえ、怖い思いしてやっと御札を取りに行けても、

帰る道には本当の怖さ、何が起こるか分からない怖さが待ってい

るものよ。加奈子。」

また変なひねりを。

あまり新しくない信号機に使われている、あの童謡だとすぐわかる者は何人いるだろうか？

加奈子の友人・有香は「さあ、続きを。」と目で促してくる。

しょうがないなあ。それじゃあ。と加奈子は敬礼の形を有香に向けた。

いぶかしむ眉を確認し、口元をさらに歪め、そして腹から声を出す。

「不肖・わたくし、木下加奈子は、

いつも冷静で気の抜けたツツコミをしてくださる友・森沢有香様の再三の注意に忠実であろうとし、

またその時までは楽勝コースでありました。しかし」

「長い。結末だけでいい。あと普通に話して。」

「はつつ。」とまた敬礼の形のまま返す。友の長い手が、自身の顔を覆う。

とりあえず、眉の上においた右手はどけて、加奈子は続きを話す。

「最後のセリフにより、あっけなく崩落した私を見て、敵は目を見開き、

その様はメデューサに囚われし者の如く。」

「つまり、あんなに女々しい男だったにもかかわらず、殊勝にも悲鳴は上げずに固まったただけだった、と。」

有香は加奈子の彼氏の、草食系とも乙女系とも言われている顔とオラを思い出す。

「そのとおり。いやあ、ああいうのって、大体私の笑い方で鳥が締め上げられる時のような声出すのにさあ。」

おどろきだよね、と言外ににじませ、少しぬるくなったアイスコーヒ―をすすする。

「いきなり戻った…、こんなのよく人格者って言えたものね。」

ねえ、あの地獄の鬼が嗤うような恐ろしいものを見て、

固まっただけならまだ何とかなるんじゃない？もう少しその人と付き合えば？」

その言に、顔全体の苦笑いしか浮かばない加奈子。

有香の大きい独り言と、付け加えられた提案、どちらにかと問われれば、

「人格者は他人が言ったことだから。彼とはあれから、一度も目が合わなかったから別れたよ。」

どちらにもと答えるしかなかるう。

「非常に残念だよ。あの泣き顔は、ほんつとくに綺麗だね。眠っていた嗜虐心をあおられたのに。」

少し背筋の寒くなる、単語の羅列に予想外のダメージを受け、有香はコーヒーの染みが広がったテーブルにつっぷす。

「もういい！こいつを人格者って言ったのどこのどいつだ！出てこい！」

180度どころか270度ぐらい違うこいつの本性、暴いてやる

！！

「あはは、そんなに力まなくても。」

自治会長の爺さんと、町一番の情報屋のおばさんあたりは、見当つくでしょ。」

「あそこらか！」

自分たちが住む町の、影の支配者とも言われている二人を思い出し、二人の魔王もかくやと言うほどの禍々（まがまが）しいオーラも、ついでに思い出し。

そして、現在この店にいて、同じテーブルに座っている全然大人格者じゃない加奈子を見て。

「…しかたないか。」

「うんうん、いつもながらあきらめが早い。賢明な判断だと思うよ。」

「

かくして、嗤い以外は人格者、という加奈子のどーでもいい評判は、守られたのである。

しゅじんごうと、あるえいがのはなし。（後書き）

いきなりスピノフみたいになっている…これは本編です…

主人公・加奈子さんの友人、有香さんのひねり（？）は、『通りやんせ（とうりゃんせ）』です。近頃は、ハトとかの鳥の声まねしたやつばかりで。つまらん。

そして、わかれてしまった二人が見たのは…豪華な船のあれ（の海賊版みたいな）です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8245o/>

いのちよりも、こいがおもいなんて。

2010年11月10日04時35分発行